

論壇

肉牛より手間かかる乳牛

少し前に北海道の十勝地方で地元の人から酪農についての話を聞く機会があった。それによると、乳牛の飼育は肉牛の飼育よりも仕事が大変であるという。毎日のように乳搾りをしなくてはならないので、ある程度は放置できる肉牛飼育より手間がかかるからだそうだ。

だから廃業をする中小規模の牧場も多いそうだ。売りに出た牧場を買い取って、大きな牧場はさらに規模を大きくするようだ。規模が大きくなった牧場は巨大な搾乳施設などを導入して効率的な経営

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

を行っている。だから北海道の酪農の競争力は結構高いという人もいる。

交渉が続けられてきた日本とEUの経済連携交渉では、日本のチーズへの関税引き下げが難航した。世界の輸出市場の半分以上を占める欧州製のチーズへの関税が引き下げられれば、日本の酪

難航したチーズ関税引き下げ

農農家が大変なことになる。農業保護を訴える人たちはそう主張する。おいしいチーズがもっと安く買えるようになるからよいのではと消費者の立場で主張をしようものなら、強烈な反論が返ってくる。

ただ、よく聞いてみると、話は

もう少し複雑なようだ。北海道の酪農は、本州の酪農よりも競争力が強い。だから北海道の生乳が本

州にあまりたくさん入ってこないように、8割ぐらいがチーズなどの加工乳となる。飲料用の生乳は

わすか2割であり、本州に入ってくるものは少ない。一方で、本州

でとれた牛乳の8割近くが生乳で

加工乳の市場価格が下がる。そうすると北海道の業者はより多くを生乳に回して、それを本州に回そうとするだろう。その結果、本州の生乳と北海道の生乳の競争が激しくなる。日本の中で牛乳の南北戦争が起きる。これはなんとか避けたい、とある農業関係者が言っていた。

将来の酪農へ布石の好機

しかし、本州の中小規模の酪農業者は本当に生乳を供給し続けるのだろうか。あちこちで牧場が廃業になっている話を聞くと、本州の業者が今後とも十分な生乳を供給し続けられるのだろうか疑問に思えてくる。将来的にはもっと北海道の生乳を本州に持ち込まなければいけないだろう。

時間をかけて、チーズなどの乳製品の輸入自由化をするべきだろう。それでも北海道の有力生産者はきちつと生き残るだろう。これまで以上に生乳比率を上げて本州の市場に売って行くかもしれない。

日本の将来を考えるとときには、高齢化という要因を常に意識しながらはいけない。酪農も例外ではない。高齢化が進み、廃業をする生産者も少なくはないはずだ。それでも安定的な乳製品の供給を確保するためには、北海道の酪農業者などの競争力を高めるとともに、海外からの輸入チャネルを拡大すべきだろう。EUとの経済連携協定は、そうした将来に向けた布石を打つ上で絶好のチャンスである。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。